偽物の番

あさじなぎ

表紙イラスト　BEEBAR

R18

偽物の番
中巻

・ｐ３　　……参
・ｐ５８　……肆
・ｐ１２０……伍
・ｐ１６４……陸
・ｐ２１１……おまけ小話

あさじなぎ
イラスト　BEEBAR

参

五月二十二日、日曜日。
午前中は課題に追われ、午後は千早に散々啼かされた。
「う、あぁ！」
後ろから抱かれている最中に千早は俺のうなじを舐め、がぶり、と歯を立てる。
普段は一度噛むだけなのに、この日は何度も噛まれ、その度に俺は痛みに喘いだ。
「い、あ……」
「中、超締め付けてくるな。そんなにいいのか？　噛まれるのが」
意地悪く囁やき千早は腰をぐい、と押し込んでくる。
「おく、当たって……奥……」
うわ言のように繰り返すと、千早はぎりぎりまで引き抜いて、また一気に奥へと押し入ってくる。
「ちはや、イく、からぁ、ちはやぁ」
鼻にかかる声で名を呼びながら、俺は背を反らし天井を仰ぎ見て精液を放った。

すると中が収縮し、千早のペニスの形が嫌でもわかってしまう。
最奥をこつこつとされて、また視界が白く染まり快感が全身を駆け巡る。
千早、まだ機嫌悪いんだろうか。
いつもよりも激しく攻め立てられ、千早が中で達した頃に俺は動くこともままならなくなってしまった。
「琳太郎」
ぼんやりとしていると、千早が後ろから俺を抱きしめてうなじをべろり、と舐めた。
「お前は、俺の側にいろ」
「千早……」
俺は、俺を抱きしめる千早の腕に手を触れる。
「俺は……どこにも行かねぇよ」
というか、行きようもないだろう。千早とは同じ大学なわけだし、卒業まで俺は、どこにも行くことなんてできないんだから。
でも……千早は？
卒業までの偽物の番、と言われた言葉はずっと俺の中に残っている。
卒業したら、俺たちはどうなる？

これでおしまい、て、なれるのか？
んなわけあるかよ。こんな関係になって俺は……俺たちはきっと、もう、元の関係になんて戻れないんだろうから。

月曜日も火曜日も、瀬名さんからメッセージが届いた。
夕飯は何を食べたかのかとか、アレルギーはあるかとか、そんなとりとめのない内容ばかりだった。
そして水曜日。
夕方、バイト先に行くとロッカールームに瀬名さんがいた。すでに着替え終えていた彼は、俺を見るなり爽やかな笑顔で言った。
「おはよー、結城」
「あ、おはようございます」
軽く頭を下げ、俺はロッカーの鍵を開けて制汗スプレーを取り出す。
「ねえ、結城」
「おわあ！」

いきなり後ろから腰に手を回されて抱き寄せられ、思わず叫んでしまう。
「な、な、なんすか、いきなり！」
「ちょっとねー気になってさー」
笑いを含んだ声で言い、瀬名さんは俺の首筋に顔を埋めた。
「あはは、超ウケる」
と言い、瀬名さんはすっと離れていく。
何なんだこの人。
振り返ると、瀬名さんは首に手を当てて笑っている。
「せ、瀬名さん？」
内心怯えながら、俺は顔を引きつらせて言った。
「ねえ、結城。もしかして、気がついてないの？」
また何かわけわからないこと言ってるぞ、この人。
「何がですか？」
俺が問いかけると、瀬名さんは手で首を二回ほど叩き言った。
「ここ。あ、もしかして意味を知らないとか？」
「……へ？」

わけがわからねーぞ。首に何かあるのか？
俺の反応を見て、瀬名さんは首から手をおろしそのままその手を腰に当てる。
「そっかー、気がついてないし知らないのか」
「すみません、何の話かさっぱりなんですが」
制汗スプレーを握りしめたまま困惑して俺が言うと、彼は俺の目の前まで来て、俺の頬を両手で挟んだ。
顔をじっと見つめ、にまーっと笑う。
「土曜日の昼、暇だよね？」
「へ？」
何を言われたのかわからず、変な声が出てしまう。
「バイト前にお昼に行こうよ！　十一時に、東口のコンビニ前で！」
「え？」
俺の返事を待たず瀬名さんは俺から離れ、そのまま手を振り、ロッカールームを出ていってしまった。
……なんだあれ？
ひとりでなんか色々言って、ひとりで勝手に決めて行っちゃうとか、わけわかんねーん

だけど？

俺は首をかしげながらスプレーをロッカーにしまい、エプロンなどを取り出した。

勝手に決められた土曜日の予定は、断る理由もなく、お昼位いいか、と思いそのままにしておくことにした。

正直、瀬名さんに聞きたいことがいくつかある。匂いの話とか、なんで俺に絡むのかとか。

そんな約束をした状態で千早に会うのは何故か後ろめたい気がしたが、そもそも彼が俺のバイト先の様子など知る方法などあるわけないので、気にしない様にしようと決めた。

そう思っていたのに。

木曜日。

夕方、千早と顔を合わせるなり、不機嫌な声で言われた。

「瀬名悠人」

一瞬何を言われたのかわからず、それが瀬名さんのフルネームだと気が付いたとき、思わず変な声が出た。

「へ？　な、な、なんでお前が瀬名さんの名前知ってんの？」
「調べた」
　憮然とした顔で言い、千早は腕を組む。
　調べたってどういうことですか、千早さん。
「医学部の二年で、親は総合病院の院長らしいな。本人は小児科医を目指しているとか」
　すみません、今言われた情報の大半が初耳ですが。
「そ、そ、そうなんだ」
「お前のバイト先にいる唯一のアルファで、特定の相手はいない、と言うところまでは調べた。あと、住所と……」
「んなことまで調べたの？」
　驚く俺とは対照的に、千早は当然、という顔をする。
「あぁ、当たり前だろう？　お前に近づく相手の事、知っておかないと対処できないからな」
「対処ってなんだよ。勝手にわけのわかんねえ三角関係作ろうとすんなよ全く」
　呆れて俺が言うと、千早は不服そうな顔になる。
　表情がコロコロ変わるなこいつ。なんなんだよいったい。

「お前は俺の番だ。誰かに手を出されるのは気に入らない」
「そんなのあるわけねーだろ。俺は一般人（ベータ）だ。普通のアルファが俺なんかに興味持つかよ」
すると、千早は下に視線を向けぶつぶつと呟き考え込んでしまう。
「……確かにそうか。でもこの間の匂い……」
なんなんだこいつ。
面倒になり、俺は千早の腕を掴んだ。
「おい、行こうぜ！　俺、早くお前んち行きたいの！」
すると、千早はばっと顔を上げ、嬉しそうな表情になる。
なんなんだ、いったい。
「そうだな」
と言い、俺の身体を引き寄せた。
そして、何かを確認するように俺の首元に顔を埋めると、低い声で俺の名を呼んだ。
「琳太郎」
「なんだよ、離せよ、こんなところでやめろよ全く」
身をよじると、千早は俺を抱きしめたまま怪訝な顔で言った。
「お前、また何かされた？」

「何もねえよ。あるわけねえだろうが」
まあ、後ろから抱きしめられたし、顔挟まれたし、なんなら昼飯の約束まで取り付けられましたが。
それを言ったらどうなるのかわからないので、俺は千早の言葉を否定する。
「押し倒されたりとかも？」
「んなこと、バイト先でやる馬鹿いるかよ」
なんでこうも発想が極端なんだ千早は。
俺の否定に千早は、眉間に皺を寄せて呻る。
「僅かだけど匂いがするから……んー、もしかしてそいつ、俺の事、挑発してるのか？」
「考えすぎだろ、ほら、いい加減離せ。視線が痛い」
ここは人通りの少ない裏門とはいえ、全く人が通らないわけではない。
女子学生がキャーキャー言いながら俺たちの横を通り過ぎていくのは、羞恥プレイでしかない。
千早は不服そうではあったが、身体を離してはくれた。
「そいつ、気に入らない」
「はいはい、わかったから、ほら、お前の家、早く行こうぜ」

まだ文句を言う千早の腕を掴み、俺は通りを歩きだし、千早が車を止めているコインパーキングへと向かった。

＊

五月二十七金曜日。
俺は宮田と向かい合い、昼飯を食っていた。
俺は天ぷらうどん、宮田はハンバーグ定食だ。
昨日、俺は千早に散々な目に合わされて腰が痛い。
食欲もあまりなく、うどんを選んだ。
長時間喘がされ、貫かれて。危うく帰れなくなるところだった。
朝起きれば身体は怠いわ、腰が痛いわで、今日は大学に来られないかと思った。
我ながらよく、登校できたと思う。
あの執着心の割に、日中は一切連絡を寄越さないし、会いにも来ないんだから謎だ。
昼休みの間なら、ここに来れば会えるのに。
どこで昼飯喰ってるんだろう、あいつ。まあ、外とか、カフェテリアとかあるしな。こ

の大学広いし。
「ねえねえ、結城」
俺がうどんを半分食べた頃、食べ終えた宮田が箸をおき、声を潜めて言った。
「何？」
「前から思ってたんだけど」
「うん」
「恋人できた？」
それを聞き、俺は思わず食べていた物を吹き出しそうになる。
俺は慌てて箸をおき、コップを掴み水を飲んだ。
「あ……僕、何かまずいこと聞いた？」
「い、や……」
咳込み、涙目になりながら俺は首を横に振る。
今まで宮田とそういう話をしてこなかった。
というか、彼が千早に襲われて以来、その手の話題を避けてきた。
まさか宮田にそんなこと聞かれるとは……俺、なんかあるのか？
「なんでそんな事思うんだよ？」

コップを掴んだまま尋ねると、宮田は腕を組み、眉間に皺を寄せた。
「だって、なんていうか……うーん……色っぽい？」
想定していなかった言葉を聞き、俺は目を瞬かせた。
……色っぽい？　そんなこと初めて言われたぞ、おい。
「ごめん、何言ってんのかわかんねぇよ」
俺が困惑気味に言うと、宮田は腕をほどき、胸の前に手を出して必死に手を振る。
「ごめん、その、変な意味じゃなくって。えーと、なんて言えばいいのかな……ごめん、僕、そう言う話題ってあんまり友達としてこなかったからよくわかんないんだけどえーと……」
困った様子で宮田は言い、きょろきょろと視線を泳がせた。
「あの、そういう匂いがするっていうか」
匂い。
また、匂いの話だ。
瀬名さんといい、千早といい、なんでそんなに匂いにこだわるんだ？
「匂いってどういう意味だよ？」
「なんていうのかなあ。恋人いるっぽい匂いがする」
本人としてはいい表現だと思ったらしく、自信満々げに宮田は言い、俺はただ困惑する

ばかりだった。
　だからなんなの、匂いって。
「そんな匂いあるかよ」
　なかば呆れつつ、俺はコップを口につけ水を飲む。
「いや、まあ、そうなんだけどさあ。なんて言うのかな。僕らってほら、人より匂いに敏感なんだよね」
　僕ら、というのは多分、オメガのことだろう。もしかしたらアルファも含むかもしれない。
「結城の匂いとは違う匂いがする気がして。でも、僕、そこまで匂いを嗅ぎ分けられるわけじゃないんだけど」
　それでも俺らとは違う匂いを感じるんだろうな。俺には全然、匂いなんてわかんねぇし。
　宮田から感じるのは使っているであろう、柔軟剤の匂いだけだ。たぶん海外製の、匂いがちょっときついやつ。
「結城から、結城とは違う匂いがするからてっきりいい人ができたのかと思ったんだけど、違うの？」
　目を輝かせて言う宮田の言葉が、小さく胸に刺さる。

恋人――か。
俺にとって千早は恋人、なんだろうか？
最初に言われたのは、偽物の番、という言葉。恋人とは違う。
しかも大学を卒業したら終わる関係だ。
――あいつは今でも、そのつもりでいるんだろうか？　卒業までの、期間限定の存在として、俺を囲うつもりなんだろうか。なんだよそれ。俺は……いったい何なんだ？
俺が言葉に詰まり視線を泳がせたからだろうか、宮田は慌てた様子で言った。
「ごめん、言えないことってあるよね。あー、でも、いいなあ。僕も恋人とか欲しい」
「でもお前、千早のこと……」
と言うと、今度は宮田が視線を泳がせた。
「あー……」
と言い、黙り込んでしまう。
「それは……だってさ、怖いんだよ、僕、あの人たちが」
間をおいて、宮田は呻くように言った。怖い。というのはわかるかもしれない。いや、痛いほどわかる。だって、千早の俺への執着、まじで怖いもん。
「彼らの僕らへの執着心てすごいからね。だからこの間、彼は僕が発情期を迎えたのに気が

付いて、僕を見つけ出したんだよ。すごいよね。学部も校舎も違うのに」

あぁ、だから匂いに敏感なのか。オメガの発情期を逃さない様に、匂いを嗅ぎつけて確実に……

そこまで考えて俺は何も言えなくなってしまう。

オメガは発情期しか妊娠できず、その期間は年に四回ほどであり、三か月に一度、一週間だけ。

だからその期間を逃さない様に、発情期のオメガを確実に捕獲して……

そう思うとやり切れない気持ちになる。

けれど、千早は宮田を捕まえようとせず俺を選び、今、囲い込んでいる。

……なんで宮田を無理やり囲い込まず、俺を選んだんだ？

うーん、訳わかんねえな。

嫌がる相手を無理に囲い込もうとしなかった、ともいえるのか。

でもだからって俺って言うのはおかしくないか？　発情した宮田を、俺が逃がしたからか？　それとも……？

――あいつがもともと俺を好きだったとか？

あるかよ、そんなこと。千早は友達で、それ以上の何かはない、と思う。

当たり前に続く関係だと思っていた。まあ、なんか妙に触ってくることとかあったけど。でも俺は……友達で、ありたかったんだけどな。

そう思うと胸が痛い。

「とりあえず、二週間前のあれ以来近づいてこないんだよね、彼。僕、毎日びくびくしてたんだけど……全然姿を現さないし。あんなに言い寄ってきてたのに……結城、何か知ってる？」

首を傾げながら言う宮田の言葉が、心の中で繰り返される。

言い寄ってたんだ……あいつ。

そんなに宮田に執着していたのに、その想いが何で俺に向いたんだ？　初めて抱かれた日に色々言われた気がするけれど、思い出そうとすると苦しさが蘇り考えられなくなってしまう。

「……おーい、結城。結城ってば。ねえ、大丈夫？」

遠くで宮田の声が聞こえ、はっとして俺は彼を見た。宮田は身を乗り出し、俺の顔をじっと見つめている。

「え、あ、え？　な、何？」

「いや、ぼーっとしてたから」

「だ、大丈夫だよ」
そう答え、俺はコップを置き、残りのうどんを慌てて食べた。

翌日、五月二十八日、土曜日。
朝、八時に目が覚めるとスマホにメッセージが来ていた。
相手は瀬名さんだった。受信したのは七時頃だ。起きるの早いなあの人。
俺は、欠伸をしながらメッセージを確認する。
『おっはよー！　今日はよろしく！　十一時だからね』
朝からテンション高めのメッセージだな。
見たからには何か返さないと、と思い、俺は眠い頭で考えて返事を入力する。
『おはようございます。わかってますよ、東口のコンビニ前ですよね？　ちゃんと行きますよ。で、どこ食べ行くんですか？』
そう送り返すと、すぐ既読が付き、返事が来る。
『えっとね、駅近くの、ラルベロっていう、イタリアンレストラン』

初耳ですが？
まあ、イタリアンなら食えるものあるだろうから大丈夫だろう。
俺は、わかりました、というスタンプを返すと、すぐにハートマークが乱舞するスタンプが返ってきた。
……なんなんだ、この人。
そこはかとない不安を抱きつつ、俺は欠伸をしながらベッドから這い出た。

昨日は千早と会っていないため、腰に痛みはない。
……まあ、通話しながらあれこれ指示はされたけれども。
俺のバイト先である本屋は、下は黒い綿パンという規定があるが、上は何を着てもいいことになっている。
俺は仕事用の綿パンと紺色と黒のボーダーTシャツ、それに半袖の黒いパーカーに帽子を被り外に出た。
時刻は十時前。今から出て電車に乗っていけば、約束の場所に十時半過ぎには着くはずだ。
その次だと約束の時間を過ぎてしまうから、早めに家を出ることにした。

外に出ると、ジワリと汗がにじむ。
今日も二十五度を超えるらしい。空に輝く太陽が、忌々しく思えてくる。
雲一つない、晴れた空だ。
駅まで歩いて七分ほどの道のりは大した距離ではないはずなのに、暑さのせいで遠く感じる。
お出かけ用のショルダーバッグの中に、麦茶を入れた水筒を放り込んできてよかった。まあ、バイトの日は水筒を持って行くようにはしているけど。これ、ペットボトル買わねーと、夜までもたないだろうな。
駅の手前でお茶を飲み、俺は人の行きかう駅の中に向かって行った。
土曜日と言う事もあり、駅はそこそこ混んでいた。
まあ、お店って十時オープンが多いし、それくらいの時間に合わせて電車に乗る人、多いもんな。
周りを見れば、中高生の集団や、カップルの姿が目立つ。中高の時、俺もあんな風に友達と電車に乗って出掛けたっけ。
ちょっとした遠出ってドキドキするんだよな。
俺が住む町は田舎で、大学がある町はちょっと都会だ。

電車で十分少々なのにえらい違いで。
うちの方にはショッピングモールなんてないけれど、あっちは駅前にあるし、デパートまである。
遊ぶところが多いから、皆隣町まで行く。
千早とも、たまに電車に乗って出掛けたっけ？
カラオケ行ったりゲーセン行ったりしたな。
……そう言えば、最近、一緒に遊びに行ってないな。
会ってもあいつの部屋で……
何をしているのか思い出し、俺は顔が真っ赤になっていくのを感じる。
何考えてんだ、俺、朝から。違う事考えよう。
……そうだよ、千早と会ってもいつも部屋行ってばっかで、食事位しか出かけてないよな。
……どこかに誘ってみようか？　うーん、でもどこだよ。
電車に揺られながら俺は、千早とどこに出掛けようかと考えた。
十分ほどで、目的の駅に着く。

俺は人の波に乗り電車を降りて、改札へと向かった。
時刻は十時四十二分。まだ少し時間があるな。でも、どこかで時間潰すには中途半端だなあ……
そう思いながら俺は、東口へと向かった。
その時。
「結城ー！」
「のわあ！」
後ろから思い切り抱き着かれ、俺は叫び声をあげてしまう。
行き交う人たちの視線が突き刺さる。
俺は抱き着いてきた人物を引きはがし、振り返って相手を確認した。案の定、そこにいたのは瀬名さんだった。
俺と同じ、黒い綿パンに長袖の白いカットソーを着て、にへら、と笑って手を振っている。
「ちょっと何するんですか、瀬名さん！」
「だってー、背中が見えたから思わず。結城、背中で誘うんだもーん」
誘うってなんだ、本当にもう。この人、わけわかんねーよ。

「暑いし、外だし、人いっぱいいるし、目立つこと辞めてくださいよ、本当に全く」
俺は顔をひきつらせつつ、瀬名さんに向かって苦情を申し立てる。
すると、彼は顎に人差し指を当て、上に視線を向けてしばらく考える仕草をした後、ぱっと明るい顔をして、言った。
「人前じゃなければいい？」
「よくないです」
被せ気味に俺が言うと、瀬名さんは文字通り、頬を膨らませる。
「えー、まじで」
「まじですだめです、いきなり後ろから抱き着くのは普通やらないです」
そもそも俺は、そこまで瀬名さんと仲良くない。
少なくとも俺はそう思ってる。
いや、レジとか仕事を教えてくれた人のひとりではあるし、シフトが被ることも多いから、そこそこ話はするけれども。
でも、ただのバイト仲間だ。それ以上でもそれ以下でもないはずだ。
瀬名さんは、口を尖らせ、
「残念」

と、拗ねた声で言う。
何なんだこの人。ほんと、変な人。
とりあえず、話題を変えよう。
「つーか、早いっすね、瀬名さん」
「楽しみ過ぎて、早く来ちゃったんだよねー」
瀬名さんは、満面の笑みで言う。遠足前の小学生か。
「それは結城だって同じじゃないの？」
「俺は、電車の都合考えると、この時間に来るしかないんですよ」
そう答えると、瀬名さんは不服そうな顔をする。
「えー？　てっきり僕に会うのが楽しみで早く……」
「来るわけないです。電車の本数、多くないんです」
そもそも、こっちにくる電車は基本、一時間に一本だ。時間によっては二本だけど。一本乗り逃すと大変な目に合う。
瀬名さんは頭の後ろで手を組み、
「残念だなあー」
などと言っている。何なんだこの人。大丈夫かこの人。

ちょっと変わった人だな、と思っていたけれど、ちょっとどころではないかもしれない。
「もう少ししないと、お店あかないんだよねー。十一時オープンだし」
言いながら、瀬名さんは腕時計を見る。
今時珍しいな、時計してる人。
「じゃあさ、結城」
言いながら、瀬名さんは俺の腕をがしり、と掴む。
「図書館行こう」
「はい？」
駅には、公立図書館の出張所がある。
そこの事を言っているんだと気が付くのに、しばらく時間がかかった。

駅ビルの一画にある公立図書館の出張所は、もちろんのことながら静まり返っている。
俺も本屋でバイトするくらいなので本は好きだが、この図書館に来たのは初めてだった。
行くなら、大学のそばにある本館の方に行くから、ここに近づく理由がない。
瀬名さんは楽しそうに図書館の中を歩いてく。本当に本、好きなんだろうな、普段と目の色が全然違う。

図書館、というか、小学校の図書室位の広さなので、さほど広くはない。それでも一般図書やライトノベル、専門書も置いてある。

そこで時間を潰した後、俺は瀬名さんと共に目的のお店に向かった。

駅の東口から歩いて五分ほどの、商店街の一画にそのお店はあった。

イタリアンレストラン、ラルベロ。

外観は、見るからにお洒落な感じ。白い外壁には蔦が絡まりレトロな雰囲気を醸し出している。

ビルの一階に作られたその店の中に入ると、全席個室と言う、俺の入ったことのない形態をしているお店だった。

イタリアンレストランなのに個室の店なんてあるんだな。

通された部屋は、畳敷きに掘りごたつみたいになっていて、くつろげる空間になっている。どうやら夜は洋風居酒屋になるらしい。

「結城、アレルギーないって言ってたし、ピザとか好きだって言ってたからさー」

席に案内され、瀬名さんは座りながら言った。

あの好きなものがあるかとかアレルギーどうのっていうメッセージ、ちゃんと意味があったのかよ。

なんだろう、そう思うとなにかこう、むず痒く感じる。好きな子に探りいれるやつみたいな、そんなことしてたのか、この人。

「ここ、パスタもピザも量が多いけど、結城なら大丈夫だよね！」

と、満面の笑顔で言われ、俺は苦笑いしつつ頷く。

この辺りのイタリアンレストランは、安くて量が多いのが特徴だ。

一人前が二人前近くあるのが普通だった。なので成人男性でも、一人前が結構きつかったりする。

ランチセットでピザとサラダ、ドリンクのセットがあったので、俺たちはそれを注文することにした。

マルゲリータピザに、生ハムのピザをそれぞれ頼み一息ついたとき、瀬名さんが言った。

「僕、本が大好きなんだよねー」

「あー、だからさっきも図書館行ったんですか？」

「そうそう。ちょっとでも時間があったら本を見ていたいし、本屋で働くのも夢だったんだ」

楽しそうに言い、瀬名さんは水の入ったグラスに口をつける。

まあ、本屋で働くくらいだし、本が好きなのはわかる。俺だってそうだ。本屋でバイト

始めた理由は漫画だとかラノベが好きだからだ。
「僕、本屋になるのが夢なんだ」
……え？
意外な言葉に、俺は目を瞬かせた。
あれ？
瀬名さん、医学部じゃなかったっけ？　俺の表情に気が付いたのか、瀬名さんは声を上げて笑い、言った。
「あはは、わけわかんない、って顔してるね、結城」
「えぇ……だって、医学部の二年、ですよね？　瀬名さん」
「うん、そうだよ。昨日も解剖実習してきたよ」
解剖実習、の意味にはすぐに気が付き、俺は口を閉ざす。
それってあれだよな？　ご遺体の解剖……あ、俺、無理。そう言うの無理。
俺は思わず手で口を押えてしまう。
「結城の反応、面白いね。そういうの、想像しちゃだめだよ。まあ、医者を目指してるのは親の意向、ってやつ？　好きなことするために必要な試練なんだよ」
「……試練で医学部に入って医者目指すって……」

そこまで言って、思い出す。
この人、アルファだった。アルファは総じて頭がいいんだ。
何が抜きん出ているかはもちろん個々で違うらしいけれど。
千早は運動も勉強も出来たなあ……高校の時、バスケで対峙するの嫌だったなあ……
「まあ、僕には大した試練じゃないよ。本屋をやる夢の為に手段は選んでいられないからね」
そう語る瀬名さんが、なんだか眩しく見える。
夢か。俺、夢とかないからな……
宮田の、普通の学生生活を送りたい、と言う夢や、千早の運命の番を手に入れたい、と言う夢。
皆何かしらの夢を持つものなのかな。
俺は、どうしたいだろう？　考えても何にも出てこない。
「夢があるっていいですね」
「あれ、その言い方だと結城には夢ないの？」
問われて俺は、答えに窮する。
俺の表情から何かを悟ったのか、瀬名さんは手をひらひらと振り、

「ごめんごめん、悪気はないから。夢ないとか別に珍しくはないし」
と言った。
「まあ、そうなんですけど……」
俺、将来どうしたいんだろう、て、思わず考えてしまう。まだ大学一年生だし、就職とか考えるのはまだ少し先だけれど。
「そんなに悩ませる気はなかったんだけど。それよりさ、結城、僕に何か聞きたいんじゃないの？」
と言いながら、彼はテーブルの上で腕を組む。
まあ、確かに聞きたいことはある。
「そうですけど……なんでわかるんですか？」
「だって、何にも知らないって、顔に書いてあるから」
楽しそうに笑いながら言われると、何かこう、もやもやとするんだけど。
どうも調子が狂うな、この人と話していると。
なんだろう、俺、瀬名さんの手のひらの上で転がされているような？
そんなことを言っているうちに、サラダが運ばれてくる。
キャベツにレタス、トマトに胡瓜などにオレンジ色のドレッシングがかかっている。そ

れを食べつつ、瀬名さんは言った。
「気になるんでしょ？　僕が言った、君の匂いの話」
「えぇ、まあ。それ、友達にも言われて」
「友達って誰？　君にマーキングしてる人？」
急にテンション高めに言われて、俺は面食らう。
マーキングって何？
「その、マーキングって何なんですか？」
俺が言うと、瀬名さんは箸をおき、頬杖をついて俺を見つめる。優しい笑みを浮かべて。
「本当に何にも知らないんだね。ほら、君のそのうなじの傷だよ」
言いながら、瀬名さんは俺を指差す。
言われて俺も箸をおいて、右手で首の後ろに触れた。
傷？　そんなものあるのか？
そしてそこで初めて気が付く。確かに何かの痕があると。
そしてそれが千早が噛んだ痕であると、すぐに気が付いた。
「え？　こ、これ？」
戸惑い言うと、瀬名さんは俺を指差しながら、その指をくるくると回す。

「それ、アルファがオメガにつける所有物の証だよ。それをつけられると、オメガはそのアルファの番になり、他のアルファは近づけなくなる。だから、マーキングって言ったんだ」

俺、知らないうちにそんなことされてた？　え、まじかよ。千早がやたらと首に噛む理由ってもしかして俺が番だから？

動揺していると、瀬名さんはさらに畳み掛けてくる。

「でも、変だよね。君はオメガじゃない。そういう匂いはしないしね。だから僕は不思議なんだ。なんで君にマーキングするアルファが存在するのか？　君にいったい何があるのかって思ったらさ、いてもたってもいられなくなって」

あぁ、この人は気が付いていたのか。俺が、千早（アルファ）に囲われていることに。

やばい、心臓がぎゅうっと締め付けられているような感じがする。

「アルファに執着される君に、僕は興味津々なんだ」

にっこりと笑う瀬名さんの笑顔が、今の俺にはとても怖いものに思えた。

俺はただ、ひきつった笑いを浮かべることしかできなかった。だって、俺、瀬名さんに千早との関係がバレてるってことだろ？　やばい、変な汗が背筋を流れていく。

そうしている間に、ピザが運ばれてくる。

ピザ一枚が三十センチ近くはあろう大きさで、とても一人前には見えない。

二枚の取り皿に、ピザカッター。
トマトソースの匂いに空腹が刺激されるが、俺は今それどころじゃなかった。
瀬名さんは笑っている。いつもと同じ、爽やかな笑みで。
それが本当に恐ろしい。
この人は、何を考えているんだろう。首の噛み痕に気が付いて、俺をこんなところに誘って。
「結城、そんなに怖い顔しなくても大丈夫だよ。別に、襲おうとか思ってないから」
言いながら、瀬名さんはピザカッターを手に取る。
俺は小さく首を振り、
「そこまで思ってないですけど、何考えてるのかわかんなくて怖いです」
そう答えて、俺は瀬名さんがピザをカットするのを見つめた。
瀬名さんは、厚みのあるピザ耳に悪戦苦闘しながら、八等分に切っていく。
「僕は面白そうだなー、と思って近づいただけだよ。他に理由なんてないし。普通、アルファってそこまで一般人（ベータ）に執着しないものだしね。まあ、僕はオメガにも興味ないけど」
あ、この人変な人だと思ったけど、想像よりも変な人かも。
オメガに興味がない？

そんなアルファ、いるのか？　アルファって何が何でもオメガを求めるものだと、ネットには書いてあったけど。

ネットで調べた情報との差に、俺は戸惑いを覚える。まあ、千早がすでに、常識外の行動を取っているけれど。

「だって、僕は本があればいいから。運命の番とか、僕は信じてないしねー。僕は面白いと思ったものにしか興味を持てないんだよ」

「そ、そ、そうなんですか……？」

そこまで本が好きなのか、この人。家の中すごそうだな。

「だから、君のお相手がオメガじゃなくって君を選んだのが本当に不思議で仕方なくって。いったい君に何があるのか知りたくて今日、誘ったんだよねー」

「いや、俺には何もないですから」

ピザが切られていくのを見つめながら、俺は首をまた横に振る。

「そっかあ。じゃあ、あるとしたら彼の、君個人への感情なのかな。まあ、アルファって人より執着心強いし、一度手に入れたら絶対に離そうとしないものだけど。だから結城にはそうさせる何かがあるのかなーって思ったんだ。あ」

ピザをカットし終え、ピザカッターをペーパーの上に置き、瀬名さんは俺の方を見る。

なんだろう、何か悪企みしているような表情に見えるんですが？
彼はにまぁ、っと笑い、身を乗り出して言った。
「じゃあさ、僕と一度寝てみる？」
「何言ってるんですか、あんた！」
個室であるのをいいことに、言いたい放題だな、この人。
俺は思わず身を引き、声を上げた。
「んなことするわけないじゃないですか、俺は男で、ベータだってば！」
「僕（アルファ）にとって、男とか女とか関係ないよー。挿れる穴があればいいもの」
言いながら、瀬名さんは戻って行き、水のグラスを手に取った。
「何言ってるんですか、真昼間から」
この人、まじで変だ。そう思いつつ、俺はフォークと手を使って、マルゲリータピザを皿に取る。
「えー？　いいじゃない、別に。減るもんじゃないし」
「減りますって！　そう言うのは恋人とか番とかとやってください」
「だから僕にはそう言う相手いないってば。生きている人間に、さほど興味ないもの」
そう言われ、最初に話した解剖実習の話を思い出してしまう。

もちろん俺は、遺体なんて親戚のものしか見たことないし、手術も解剖もドラマでしか知らない。

でも想像してしまって、あらゆるところが痛くなるし気持ち悪くなってくる。

「僕はセフレが何人かいるし、ベータともしたことはあるけど、首に噛み付くほどじゃなかったなあ。だから、君に興味……」

「もたないでくださいやめてください。俺はそういうのいらないです」

きっぱりとお断りを入れ、俺はピザにかぶりつく。

うん、美味しい。

一口食べると空腹が蘇り、俺はいっきにピザを一切れ食べ終えた。

「そうかー。残念だなあ。でもさあ、結城」

「何ですか」

顔を上げると、瀬名さんはマルゲリータピザを皿に取っていた。

「なんでそんな、幸せそうじゃないの？」

「……え？」

想像とは違うことを言われ、俺の口から変な声が出る。

幸せ？

「ほら恋人のいる人って、もっと幸せなオーラを出してるものだけど、結城からはそういう感じしないからさ。何かあるのかな、と思って」
「え、あ、えーと」
何を言えばいいのかわからず、俺は視線を泳がせてしまう。
動揺が顔にも声にも表れているだろう。
瀬名さんは、マルゲリータピザを食べきると、生ハムピザに手を伸ばす。
「ねえ、結城は、その人といて、楽しいの？」
無邪気に笑い言われた言葉が、俺の心をかき乱した。

＊

十三時からのアルバイト。全然身が入らなかった。
流れるようにレジの対応をし、お客様の問い合わせに答え、品出しをし、売り場の整理をして。
そして、休憩時間に瀬名さんに言われたうなじのマーキングについて調べた。
アルファがオメガのうなじを噛むのは番である証であり、噛まれたオメガはそのアルファ

の所有物、と言う事になるらしい。
オメガは発情期になると、アルファを誰彼かまわず惹きつけてしまう匂いを発するらしいが、うなじを噛まれることで番の契約が成立し、匂いを発しなくなるとか。
どういう仕組みだよ。
俺はオメガじゃない。だからいくらうなじを噛まれても、番の契約は成立しない。するわけがない。そう思い、俺はうなじに触れる。確かにある、噛み痕。
なんで千早がここを噛むのか不思議に思っていたけど、俺を番にするためか？
『偽物の番』
二週間前に、千早に抱かれて言われた言葉。
身代わりになれと。性欲を満たすためとも言ってたな。
そのくせ、愛してやるとも言って来て。わけわかんねえな、あいつ。
俺はぼんやりと、休憩室のテーブルを見つめる。今この部屋には誰もいない。わずかに、店内ＢＧＭが聞こえてくるだけだ。
その為、いろんな考えが頭の中を駆け巡る。
千早にとって、俺、宮田の身代わりなんだもんな。
運命の番って、魂レベルで繋がってるっていうし。その絆を切る方法なんてあるわけが

ないよな。

でも宮田が拒絶して、結果俺は、千早に囲い込まれて。

開発されて……なんか開発って響きヤだな……

でもその通りだし。

卒業までの期間限定。終わりのある関係。卒業したら、解放されるじゃねえか。卒業さえすれば、この状況は終わるんだか。

何だ俺、なんでこんなに心が揺れるんだ？

千早は友達だ。高校からの友達で、同じ大学に入って。

これからも関係は変わらない、と思ってた。なのに、週に三回あいつの家に行き、顔を合わせれば抱かれて。

ただの、身体だけの関係？　俺は本当に性欲を満たすだけの存在なのか？　でもその割には執着すごくねえか？

あー、わけわかんなくなってきた。

「結城、おっつー」

降ってきた声に驚き俺はびくん、と身体を震わせた。

顔を上げると、テーブルの向こう側に瀬名さんが座っていた。

彼は焦げ茶色の小さな手提げバッグからパンとコーヒーと、ハードカバーの本を出し、それをテーブルに置く。

「あ、あ、お、お疲れ様です」

俺と瀬名さんは、出勤時間が一緒なので休憩時間も被ってしまう。

時刻は十五時半。時間も時間なので、この休憩室には俺と瀬名さんしかいない。

今、瀬名さんとふたりきりはちょっときつい。

「なんかぼんやりしてたけど、喰わなくて大丈夫？」

そう言われ、俺はテーブルの上に置いたままの、コンビニで買ったおにぎりの存在に気が付く。

あ、全然喰ってなかった。

俺はあわてておにぎりを手に取り、フィルムを外した。

「あ、もしかして、僕が言ったこと気にしてる？」

「いや、そんなんじゃないです」

見え透いた嘘を言い、俺は鮭のおにぎりにかぶりつく。

スマホを見ると、すでに休憩時間は二十分過ぎていた。

やべえ、俺、そんなにぼんやりしていたのかよ。

「やっぱりさあ、結城、僕と……」
「何もしませんから。ここ、どこだと思ってるんですか」
この数時間で、俺の中での瀬名さんイメージはかなり崩れ去っている。
ちょっと変わった人だな、くらいには思っていたけど、医学部だし、すげえ、と思っていたのに。
今となってはかなり変で、厄介な人だ。
しかもなんか誘ってくるし。こんな人類、初めて会ったよ。
瀬名さんは、さっさと生クリームたっぷりの菓子パンを平らげると、コーヒーを飲み、本を開く。
「そっかー。じゃあ、気が変わったら教えてね」
「変わるわけないです、何言ってんですか本当にもう。からかうのやめてください」
内心呆れっつ言うと、瀬名さんは本に目を落としたまま言った。
「僕は本気だよ」
さらっと言われ、何を言われたのか理解するのに時間がかかる。
本気？
「俺は瀬名さんにそんな興味ないですから」

しどろもどろになりつつ俺が言うと、瀬名さんはふざけた口調で答えた。
「それは残念だなー」
絶対俺、この人にからかわれていると思う。
瀬名さんは、本を読んでいるため表情がよくわからない。
これはもう、声をかけても反応なさそうだな。
言うだけ言ってこれかよ、まったく。
俺はおにぎりをさっさと平らげ、スマホを手に取った。

＊

閉店時間までバイトをし、俺は本屋を後にする。
時刻は二十一時半。スマホを見ると案の定、千早からメッセージが来ていた。
それを見て、自然と胸が高鳴っていく。
俺、千早と会うの楽しみにしてんのか？　……早く会いたいと思う気持ちは、ある。
俺は今、瀬名さんに言われたことで心の中がぐっちゃぐちゃになっている。
だから、早くあいつに会いたい。

会って、この想いを何とかしたい。俺にとって千早が何なのか、ちゃんと確認したくて。
そして、千早にとって俺がどういう存在なのか、確かめたくて。
コンビニ前で待っている、と書いてあったので俺は小走りに東口へと向かった。
コンビニ前に息を切らせていくと、ジーパンにカーキの半袖を着た千早の姿をすぐに見つけた。
あと数メートル、と言うところで、俺は思わず足を止める。
会いたい気持ちは確かにあるのに、足が動かなくなってしまう。
俺にとって、千早は何だろう？　友達？　恋人？　セフレ？
彼は俺に気が付くと、にこっと笑い、近づいてくる。
「どうしたんだ、琳太郎」
さっきは確かに会いたい、という気持ちが溢れていたのに。
迷いが俺の中にある。
「琳太郎？」
千早の手が、俺の手に伸びてそっと掴まれる。
「どうかしたのか？」
「え？　あ……な、なんでもない」

笑って首を振るが、たぶん、誤魔化せはしないだろう。千早は、俺の感情の動きに敏感に反応する。

「とりあえず、帰ろう」

普段なら、人前で手を掴まれて歩くなんて全力で拒否するんだけど、今日はそんな気力もなく、手を引かれるまま夜の街を歩いた。

千早の家に着き、リビングのソファーに腰かける。

いつもは部屋に入るなりキスされるのに、今日はまだされていない。

キッチンで千早は飲み物を用意して戻ってきた。グラスに入っていたのは、冷たいココアだった。

普段は麦茶なのに、今日はどうしたんだろうか。

「ココアなんて珍しいな」

「バイト終わりで疲れてるかな、と思って」

甘い飲み物は好きだし、ココアも好きだから正直嬉しい。

俺は、グラスを持ちそれをじっと見つめた。

幸せそうに見えないとか、寝てみないか、とか、瀬名さんに言いたい放題言われたのが、

ずーっと心に引っかかっている。
だからと言って、千早になんて切り出したらいいのかわからなかった。
「琳太郎」
「うん」
「さっきから微動だにしてないけど、大丈夫？」
「え？」
千早の声で我に返った俺は、グラスと横にいる千早を交互に見た。
どうやら、グラスを持ったまま固まってしまっていたらしい。
「あ……」
「お前、変だぞ。何かあったのか？」
「う、ん……まあ……」
呟き俺は、グラスに口をつけた。ココアの甘みが、口の中に広がっていく。
「なあ千早」
「何」
「何でお前、俺の首噛むの？」
グラスを置き、ソファーの背もたれに身体を預けて顔だけ千早に向ける。

千早もグラスを置き、身体ごと俺の方に向ける。
「あぁ、もしかして、誰かに言われた？」
千早の目が、すっと細くなる。
なにこれ怖い。背筋に嫌な汗が流れていく。
「だって、俺にそんなことしたって番にはなれないのになんでって思って」
一気に言って、俺は押し黙る。
千早の目が怖い。あれ、俺なんかまずいこと言ってる？
「琳太郎」
声と共に手が伸びてきて、腕を掴まれたかと思うと身体を引き寄せられてしまった。
「おわっ」
後頭部に手が回り、息がかかるほど近くに千早の顔が来る。千早に見つめられて俺は思わず身体を強張らせた。
「俺がお前を選んだ。言っただろ？　お前は俺の番だ」
「に、偽物だって最初に言ったのはお前だろ？　俺はそもそもベータだし、お前の『運命』にはなれないんだから」
「琳太郎」

低く、威圧するような声に俺の心が震える。この声は苦手だ。逆らえなくなってしまうから。
「な、なんだよ」
「お前は、俺の『番』だ。そう、俺が決めたんだからな」
「だって、お前が卒業までの期間限定って言ったんだろ？　それ過ぎたら俺は……」
俺はどうなるんだ？
ゆらゆらと心が揺れる。
なんで俺、こんなに動揺してるんだろ？　卒業したら、以前のような友達に戻るんだろうか？　それとも、俺は捨てられるのか？
視界が歪み、そこで始めて、俺は泣いていることに気が付いた。
「琳太郎」
名を呼ばれたかと思うと、顔が近づき唇が重なる。
すぐに舌が入り込み、口の中を舐め回されてしまう。
「ん……」
唇が離れ、俺は千早にしがみ付いて息をついた。やばい、苦しい。
「卒業まで、お前は俺の『番』だ。だから首に噛み付くのは当たり前だろう？　何の問題が

ある」

卒業まで。

その言葉に胸が痛くなってくる。

あぁ、最初に言った通りなんだな。

卒業までの間の、偽りの存在。

『お前が代わりになればいい』

確かにそう言われた。そして今に至る。

「だからそれまでお前は俺の『番』だ。それに嘘はない。何の問題があるんだ？」

自信満々に言われ、俺は何も言えなくなってしまう。

根本的に何かがずれている。

千早ってこんなやつだったのか？　なんで卒業まで、なんだよ。その後俺は、俺たちはどうなるんだ？

「それともお前、卒業してもこの関係を続けたいのか？」

「え……」

卒業しても、この関係を続けたいのか……

そう問われると頭が真っ白になる。

俺、どうしたいんだろう。
偽物と言われて、それはそうだ。俺はどうあがいても本物の番にはなれねぇもん。だって俺は、ベータだから。
でも俺は……じゃあ本物になりたいのか？　え、本物って何。
やばい、わけ分かんなくなってきた。
千早を見れば、彼は不審な顔で俺を見つめたまま首を傾げている。
「お前、何を言われた？」
「……え……」
「お前、誰かに何か言われたんじゃないのか？　お前が自分でその傷に気が付くとは思えないからな」
確かに今まで気が付きませんでしたけれども。
千早の言葉に、俺はさらに動揺してしまう。
「宮田、じゃないな。もし彼なら、とっくにお前は気が付いていただろ？　てなると……例のバイト先の？」
なんでそんなに察しがいいんだよ。千早の声、めちゃくちゃ怖いんですけど。
「そ、そんなんじゃあ……」

否定しようとするけれど、うまく言葉にできないし、声が震えてしまう。
「何を吹き込まれたのか知らないが、俺がお前を選んだんだ。それをお前は疑うのか？」
「ちは……」
名前を呼ぼうとすると、千早の長い指が唇をなぞる。
「わからせてやるよ、琳太郎。俺がどれだけお前の事を想っているのか」
「わからせるってどうやって……」
俺の心に、恐怖と期待が同時に押し寄せてくる。
ああ、この後きっと、俺は……
考えるだけで、身体の奥底が熱くなっていく。
この二週間で俺の心と身体は、だいぶ変えられてしまったように思う。
千早によって。千早が望むとき俺は欲情し、身体を開くようになってしまった。ドラマなどでみかける発情期のオメガのように。
思わず唾を飲み込むと、千早は唇から頬を撫でて、そして、低い声で囁く。
「夜は長いからな。身体と、心に俺を刻み付けてやる」
それを聞き、俺は思わず吐息を漏らした。
その後俺はソファーで服を脱がされ、千早にペニスを舐められていた。

ねっとりとした舌がペニスに絡まり、裏筋を舐めあげる。
「ちは……や……」
明るい照明の中でこんなことをされ、俺は恥ずかしさに手で口をふさいだ。
千早が、俺のペニスを舐めている。
その事実が俺を一気に煽り立てていく。
「あ……」
じゅるじゅると先走りを吸い上げる音が卑猥に響き、俺のペニスは硬さを増した。
やばい、これ。
後孔の奥が疼き、物足りなさに自然と腰が浮いてしまう。
すると千早は俺のペニスから口を離し、内腿に口づけた。
「琳太郎、腰が動いてる」
「だって……気持ちいい、からぁ……」
息を切らせて言うと、千早はびくんびくん、と脈打つペニスを指先で弾いた。
「あ……」
「まだ始まったばかりだぜ？　時間はたくさんある。どれだけ俺がお前を愛おしく思ってるのか、その身体に染み込ませてやる」

俺を見上げる千早の目は、肉食獣そのものだった。
その目に俺は、思わず息をのむ。
千早は俺をソファーに横たわらせると、右の胸を舐めながら左の乳首を指先でこね回した。
千早によって開発されたそこはすぐに硬くなり、甘い痺れを生み出す。
「……乳首、ばっかり、やだぁ……」
「何で？　ここ、ぷっくりと膨らんでおいしそうだぜ？」
そう言った後、千早は俺の乳首に軽く歯を立てる。
敏感になった身体は、痛みをすぐ快楽に変えていく。
「う、あ、あ……噛むな、よ……」
「そう？　ここは正直なようだけど」
乳首から口を離した千早は、にやにやと笑いながら俺のペニスを指先で弾いた。
そこからは、先走りがだらだらと溢れ続けている。
俺の後孔は物欲しそうにひくつき、奥が疼いて仕方ない。
早く欲しいのに、千早は一向に、そこへ触れようとはしなかった。
「もう、辛い、よお……千早ぁ」

涙目になりながら訴えると、千早は俺に顔を寄せ、唇を重ねてきた。
俺は千早の背中に腕を回し自分から舌を出すと、その舌が吸い上げられる。
唾液の絡まる音が卑猥に響き、身体だけじゃなく耳も犯されていく。
「ん……」
口が離れたとき、唾液が漏れ出て口の端を流れていく。
すると千早は指先でそれを拭い、その指をべろり、と舐めて妖しく笑った。

勃起したまま俺は風呂場に連れて行かれ、身体を綺麗にされたあと、湯船に手をつくように言われた。
あぁ、やっと挿れてもらえる。
そう思うと、俺の心は悦びで満たされていく。
千早の手が俺の腰を掴みそして、一気に後孔へと入ってきた。
「う、あ……」
浅い所からゆっくりと奥まで貫かれて、俺の視界は白く染まる。
あぁ、俺が欲しかったのはこれだ。
この奥をこじ開けられる感覚、気持ち良すぎておかしくなる。

「俺がお前を選んだ。運命が俺を拒むなら、俺が運命を決めればいい、そう思わないか、琳太郎」
　激しく腰を打ち付けながら千早は言うが、全然言葉が頭に入ってこない。
「う、あぁ……」
「運命の女神は悪戯好きらしいぜ？　運命が俺から逃げるなら、自分で作ればいい。そうだろう、琳太郎」
「く、あ……」
　最奥を貫かれ、俺は何度目かの絶頂を迎えた。
「ちは、や……」
「お前が俺を止めたのは、運命だったのかもな」
「奥、だめ、イイ……そこ、イく、またイく、からぁ……！」
　涙目になりながら訴えるが、千早の動きは全然止まらなかった。
　ぎりぎりまで抜き、前立腺を刺激した後奥まで挿れる。
　それを繰り返されるものだから、俺は快楽で頭がおかしくなりそうだった。
「出すぞ、琳太郎。中に……」
「あぁ……」

奥に入ったまま、千早は腰の動きを止める。
腹の中が熱い。あぁ、出されたんだ。腹の中に。
どんなに出されても何も生まれないのに。
それでも千早は俺を抱くのをやめはしない。
千早に開発された身体は、一度の行為では満足できず、腹の奥の疼きは止まらない。
それは千早も同じようで、抜かずにそのまま腰を揺らし始めた。
中の精液が、千早が動くたびに後孔から漏れ出て尻から流れていく。
「ちは、や……」
名を呼ぶと、千早が覆いかぶさりそして、うなじへと顔を埋める。
そしてそこに口づけたかと思うと、かぶり、と噛み付いた。
「い、あぁ……ぁ」
千早の番である、という証。俺は嬉しいんだろうか？
いくら噛まれても俺は本当の意味での番になれるわけではないのに。
あの時、番の身代わりだと、千早は言った。
始まってまだ二週間だ。卒業までまだ三年以上、ある。
それまでに、この空虚を埋めることができるだろうか？

……あれ、さっき千早、何か言っていなかったっけ？
運命を……何だっけ？
だめだ、快楽にとけた頭では考えても思い出せない。
風呂場で散々啼かされたあとベッドに移っても行為は続き、気が付くと朝を迎えていた。